

# 株式会社コーチャー

## ■介護福祉事業は人手不足

コーチャーの創業は東京五輪直前の昭和38年12月。40年の節目に当たる平成15年に福祉事業部を立ち上げ、パナソニックエイジフリーショップ「ふじやま」をオープンしました。ショップでは福祉用品の販売のほか、ケアマネジャーとの連携のもと、車いすやベッドのレンタルなどを行っています。

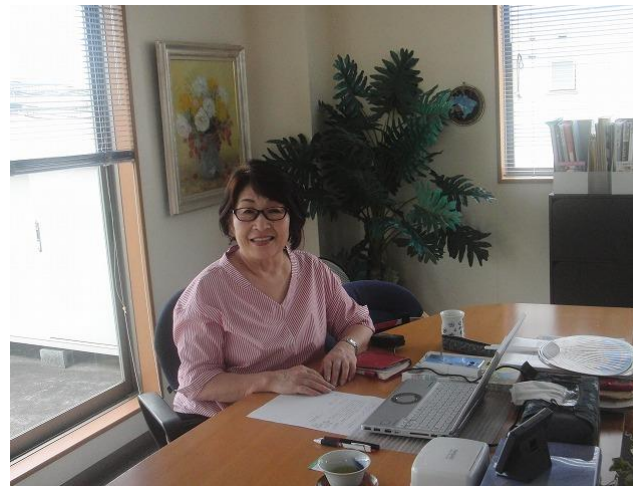
介護に関する仕事は年々需要が増加の一途で、人手が不足しがちです。同社でも事務職は比較的採用に苦労しませんが、営業社員は集まりにくく、市が主催する就職フェアに出展したり、ハローワークに求人票を出したりしてきました。また、せっかく勤めてくれた人の中にも辞めていってしまう人もいて、人材確保が難しい時期もありました。ただ最近では社としての社会貢献が評価されたためか、渡邊啓視福祉事業部長は「人手不足は解消されつつある」と話しています。

## ■ユニバーサル就労との出会い

ユニバーサル就労については数年前に富士市で話題に上り始めたころから、渡邊さんを中心に人事担当の総務部長らとの間で何か協力できないか検討し始めました。大きな契機となったのは市のユニバーサル就労支援センターが発足して、以前から知り合いだった支援員から直接企業説明会への出席を誘われてからです。

渡邊さんはもともと、製造業としてのコーチャーから、福祉事業部を独立させたご本人で、NPO法人「楽しいことやら座」の理事長として介護施設の訪問や音楽を通じた地域

交流活動、災害時に備える断水トイレシート  
の製造など、楽しみながらの福祉活動を展開  
してきました。その一環としての作業場「び  
えたす」では、障害者の職業訓練や高齢者の  
就労支援事業も行っており、現在も4人の障  
害者が働いています。そのほかに就労体験者  
も何人か受け入れてきました。



渡邊啓視コーチャー福祉事業部長

## ■特に構えることもなく

コーチャーが採用したIさんは、大学在学中に骨髄性白血病にかかり、高熱のため通学が困難になったり、時には2週間ほど動けなくなったりしたそうです。アルバイトをしても体力的に耐え切れず休まざるをえないこともあり、卒業は同級生より2年遅れになりました。

Iさんがユニバーサル就労について知ったのは卒業を翌年に控えた平成29年の暮れ。新聞記事や両親のアドバイスもあって、市の生活支援課に相談、支援センターを紹介してもらいました。Iさんはセンターの面談で、興味のある仕事や働き方について話したり、各

種セミナーに出席したほか、履歴書の書き方など就職に関する基礎的な知識を教えてもらいました。そのうえで、4月に初めてコーチョーの福祉事業部を訪ね、2週目には就労体験、3週目には無償コミューターと進み、ゴールデンウィーク明けにはパートとして採用が決まりました。

Iさんに働いてもらうことになった会社では、特別な対応を取ることはありませんでした。たとえば現在(6月中旬)Iさんは、1週間の勤務日のうち1日は体を休める日にして、あとの4日間は午前9時から午後3時まで働くことにしています。午前中はファイルの整理などをして、午後は営業部門のサポートとして利用者宅への訪問の約束を取り付けたり、自ら車を運転して利用者宅を訪問したりしています。本社の製造部門だと短時間だけ、という働き方は難しくても、「ふじやま」では社員の代行をIさんが務め、Iさんが休む時は社員がフォローできるなど、ほとんど問題なく仕事に溶け込んでいるようです。

## ■できる範囲で

「ふじやま」の統括マネジャー渡邊佳那子さんは「初めて会った時に病気のことも包み隠さず話してもらえたのでどう対応したらよいか分かりやすかったです。体調に不安を抱えていても出来る仕事はあります。今の人数で社員が足りないわけではありませんが、仕事を分けることで営業社員が動きやすくなっているのも確かです。これからもできる範囲で頑張ってもらいたいです」と期待しています。

Iさんは「毎日決まった時間に勤めに出かけて、仕事して帰る。それでお給料をもらえる。(働く)時間は短いけど『私にも働ける』と自信になりました」と話しています。また働きづらさを抱えた人たちには『自分はどうだ』と決めつけないことが大切。具体的に体験することで分かってくることもあると思います」とアドバイスしています。



渡邊佳那子「ふじやま」統括マネジャーと  
打ち合わせをするIさん



パナソニックエイジフリーショップ  
「ふじやま」=富士市瓜島